

『長秋詠藻』評釈（11）

文学部 日本文学科 檜垣孝

Notes on "Chōshyū Eiso" (11)

Takashi HIGAKI

[要旨]

藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。（その11、四二八番から四三三番。）

はじめに

はじめに、前稿「長秋詠藻」評釈（10）」の補訂をしておきたい。

四二四番歌「あはれ今日みのりの末を聞くことも譲りおきける印なりけり」の、詞書「囑累品」の行の一行前に、見出し語「評釈」の文字一行が抜けていたので、挿入するよう訂正しておきたい。

次に、四二七番歌「誓ひける心のやがて海なれば人を渡すも煩ひもなし」の、「評」中の「当評釈」の部分について、（6）は「当評釈（6）」のつもりであったが不明確な表記であったので、「当評釈」は「拙稿『長秋詠藻』評釈」、（6）はその第六号であることが明確に分かるよう、「拙稿『長秋詠藻』評釈（6）」と訂正したい。

また、注（2）の、「当評釈は、私家集大成本を用いていること、当評釈（1）および（8）の凡例参照。」という文章も、前項同様正確を期し、拙稿評釈が底本に私家集大成本を用いていることは、拙稿「長秋詠藻」評釈（1）」および「長秋詠藻」評釈（8）」の凡例に示している。と改めたい。

評釈

陀羅尼品

乃至夢中 亦復莫惱

428 現にはさらにも言はず寝る玉の夢の中にも離れやはする

【題意】「陀羅尼品」の歌。また、(夜叉等が修行者を悩ますために)夢の中に現れても、吾等(十羅刹女等)は、なお悩ますことのないように守護しようという趣意を詠んだ歌。

【歌意】現実では改めて言うまでもない。(夜叉等が修行者を悩ますために現れる)夢の中にあつても、十羅刹女達の守りを得て、修行者は悩まされることなく、仏法から離れることは決してないのである。

【語釈】◇陀羅尼品 「陀羅尼品」は【法華経】の第二十六品。この品では、諸仏を供養するよりも、「法華経」の一句でも受持し修行する方が功德が多いと説く釈尊に依えて、薬王菩薩以下の諸菩薩、毘沙門天王達、十羅刹女達によつて「法華経」を受持し修行する者を護るといふ決意の表明とその陀羅尼が次々に示される。「陀羅尼」はサンスクリット語の音写で「総持」と漢訳する。本来は、修行者が心の散乱を防いで集中し、教法や教理を記憶し保持するために用いた呪文であるといふ(『岩波仏教辞典』)。◇乃至夢中 亦復莫惱 また、(夜叉等が修行者を悩ますために)夢の中に現れても、吾等(十羅刹女等)は、なお悩ますことのないように守護しようという意。この句は、薬王菩薩以下の諸菩薩が次々と陀羅尼を述べてゆき、最後に十羅刹女達が陀羅尼を述べるその後、自分たちの決意を述べる長行部分に出てくる。この句を含む教句を引用すると、

是十羅刹女。與鬼子母。并其子。及眷屬。俱詣佛所。同聲白佛言。世尊。我等亦欲擁護。讀誦受持。法華經者。除其衰患。若有何求。法師短者。令不得便。(中略)寧上我頭上。莫惱於法師。若夜叉。若羅刹。若餓鬼。若富單那。若吉蔗。若毗陀羅。若健駄。若烏摩勒伽。若阿跋摩羅。若夜叉吉蔗。若人吉蔗。若熱病。若一日。若二日。若三日。若四日。乃至七日。若常熱病。若男形。若女形。若童男形。若童女形。乃至夢中。亦復莫惱。

この十羅刹女は鬼子母並びにその子及び眷屬と俱に仏の所に詣り、声を同えて仏に白して曰わく「世尊よ、われ等も亦、法華経を讀誦し、受持する者を擁護りて、その衰患を除かんと欲す。若し法師の短を伺い求むる者ありとも、便りを得ざらしめん」と。(中略)「寧ろ我が頭の上に上とも、法師を悩ますことなかれ。若しくは夜叉にしても、若しくは羅刹にしても、若しくは餓鬼にしても、若しくは富單那にしても、若しくは吉蔗にしても、若しくは毗陀羅にしても、若しくは健駄にしても、若しくは烏摩勒伽にしても、若しくは阿跋摩羅にしても、若しくは夜

又吉蔗にしても、若しくは人吉蔗にしても、若しくは熱病せしむること、若しくは一日、若しくは二日、若しくは三日、若しくは四日、若しくは乃至、七日にしても、若しくは常に熱病せしむるにしても、若しくは男の形にしても、若しくは女の形にしても、若しくは童女の形にしても、乃至、夢の中にも亦復、悩ますことなかれ」と。(岩波文庫『法華経』、下巻)

とある。古典大系『長秋詠藻』の頭注は、「乃ち夢の中に至り亦後に悩み莫し」と訓んでいる。ただし、『法華経』の他の訓読本も岩波文庫本のよ
うな訓み方である。⁽¹⁾句末を、「(悩み)莫し」と終止形として訓むよりも、「(悩ますこと)なかれ」と命令形として訓む方が、経典の内容に沿う訓
み方であろう。また、「乃至」も「乃ち……至り」とは訓まないであろう。『長秋詠藻』の注釈書では、和歌大系『長秋詠藻』が、「乃至夢ノ中ニテ
モ、亦復悩スコト莫カレ」と訓んでいる。◇現にはさらにも言はず 現実では改めて言うまでもない。この表現の早い例として、『万葉集』巻第
四、相聞、七八四番歌、

大伴宿禰家持、娘子に贈る歌三首

現にはさらにも言はず 夢にだに妹が袂をまさ寝とし見ば (古典大系本)

がある。新編大観『万葉集』によると、この初二句は西本願寺本による訓、「ウツツニハ サラニモイハズ」が記されているので、俊成の時代には
「現にはさらにも言はず」の句形で知られていたと知られる。和歌大系『長秋詠藻』は、この家持歌を『風雅集』から引用し、「現にはさらにも言
はず」の句形で注している。◇寝る玉の夢の中にも (夜叉等が修行者を悩ますために現れる) 夢の中にあつても。古典大系『長秋詠藻』は「寝
る玉の夢」に、「寝てみる玉のような夢」と注し、和歌大系『長秋詠藻』は「寝る玉の」に、「夢の異称とされるが、枕詞的用法。『若詠夢時、ぬ
たまのと云』(喜撰式)。「寝る」意を懸けるか」と注する。ここでは「寝る玉の」を「夢」を導き出す枕詞的用法の詞と解し、経典の内容を括弧内
に補って訳した。◇離れやはする (修行者は) 仏法から離れるであろうか、離れることは決しないのである。「やは」は、係助詞「や」と「は」
の連語で、動詞「す」の連体形「する」と呼応して反語の意を表す係り結びとなっている。仏法は、ここでは『法華経』の教え。

【評】 修行者が十羅刹女達の守護を得て、『法華経』を受持読誦して、『法華経』の教えから逸脱することなく邁進してゆく様を詠んで、その教え
の偉大なことを讃えた歌。

歌題は、経典の内容に沿って、十羅刹女達が主体となつて修行者を守護するという方向で理解すべきであろうが、和歌は、守られている修行者
が主体となるような詠み方がされている。このことに関して、石原清志氏が、

鬼が時には男、女、童子、童女の姿になり、時には夢の中まで現われて、『法華経』受持者を悩ませようとしても、この呪をとなえて、その害か
らのがれさせるようにしたい、というのである。⁽²⁾の歌は、この末尾の部分に詞書としている。「乃至夢の中にも亦復悩ますこと莫れ」とい
うのは、十羅刹女の『法華経』受持者への悪鬼の迫害からの救護の呪文である。それが⁽²⁾の歌になると、末の句の「はなれやはする」の主語と

なるものは何かという点で、原典の忠実な理解とはいささか背反する。⁽²⁾
と述べ、その矛盾について考察を加えた上、

②⑥の詞書を含む原典を総括的に考えるならば、結局は、純粹にして熱烈なる「法華経」信仰に尽きるのである。作者俊成はこの点を広義に解釈して、②⑥の歌は十羅刹女の擁護をうけた「法華経」受持者の信仰的態度を歌い、「陀羅尼品」の「法華経」鼓吹の精神を把握し、理解し、詠歌したものを受容しておきたい。⁽³⁾

と詳述されている。これに対し、山田昭全氏は、俊成歌の末句「はなれやはする」を、石田氏の解釈では歌題句「亦復莫惱」との結びつきが説明できないとし、「観普賢経」の「普賢菩薩復更現前、行住坐臥不離其側。乃至夢中常爲說法」に基づくのであろうということを、俊成当該歌と同題で詠んでいる西行の「聞書集」収載「法華経二十八品歌」の和歌、

陀羅尼品 乃至夢中、亦復莫惱

夢のうちに醒むる悟りのありければ苦しみなしと説きけるものを(二八)

の評釈に引きつけて述べておられる。西行歌の場合は、「観普賢経」の別の経文句「乃至夢中常爲說法、此人覺已得法喜樂」に依拠した表現であるとされ、歌題と和歌との主体の違いを説明されている。⁽⁴⁾

本稿では、修行者を三人称的に訳したが、修行者である私は、十羅刹女達の守護を得て悩まされることなく、仏道修行に邁進する、という強く強い意志を表明する一人称としても訳せると考える。また、「修行者である私」は、即ち作者俊成であると理解してもよい。

当該歌の歌題二句を含む題で詠まれたものに、選子内親王の、

陀羅尼品 若童男形、若童女形、乃至夢中、亦復莫惱

何といへど夢の中にもあやまたじ法を保てる人となりなば(「発心和歌集」、五〇)

が先行歌としてある。この歌も、題と和歌では主体が変わっている。俊成はこのような詠み方を撰取したのかも知れない。

嚴王品

又如一眼之龜值浮木孔

429 我われやこれ浮木うきぎにあへる龜かめならん劫こふはふれども法りは知らぬを

【題意】「嚴王品」の歌。また、（仏に出会うことが難しいのは）一眼の龜が（大海に漂流する）浮き木の穴に出会うようなものであるという趣意を詠んだ歌。

【歌意】 私は、まあ、（大海に漂流する）浮き木に偶然にも出会った龜なのだろうか。年齢は重ねたけれど仏法は知らないのに、よくも出会ったものだ。

【語釈】 ◇嚴王品 「嚴王品」は、「妙莊嚴王本事品」を略したいいで、「法華經」の第二十七品。この品では、釈尊が大衆に華嚴菩薩（妙莊嚴王）の過去の事績を語る。釈尊は、遠い過去に妙莊嚴王という王が淨徳夫人と淨藏・淨眼の二王子に導かれ、その時代の雲雷音宿王華智仏の説法を聞き、信を起しし仏を供養すると、仏は妙莊嚴王に対し未来において娑羅樹王仏となるであろうと授記をすること、出家した後の妙莊嚴王は八万四千年の間修行に励み一切淨功徳莊嚴三昧を得ることなどを説いて聞かせ、この妙莊嚴王が現在の華嚴菩薩であり、淨徳夫人が光照莊嚴相菩薩、二王子が葉王菩薩・葉上菩薩であると説く。◇又如一眼之龜值浮木孔 また、（仏に出会うことが難しいのは）一眼の龜が（大海に漂流する）浮き木の穴に出会うようなものである。この句は、長行部分に出てくる。この句を含む前後の部分を用いると、

佛難得值。如優曇波羅華。又如一眼之龜。值浮木孔。而我等宿福深厚。生值佛法。

仏に値いたてまつることを得ること難きこと、優曇波羅の華の如く、又、一眼の龜の、浮木の孔あなに値なうが如ければなり。しかるに、われ等は宿福、深厚にして、生れて仏法に値えり。

（岩波文庫『法華經』、下巻）

となつてゐる。この句は、仏に出会うことの難しさを喩えたもので、淨藏・淨眼の二王子が出家を願ひ出た時に、父と母に、仏に会うことは（三千年に一度しか咲かないという）優曇波羅華を見るように難しく、一眼の龜が（大海に漂流する）浮き木の穴に出会うくらいに難しいことだけだ、幸い前世の善行の報いを得て雲雷音宿王華智仏の時代に生まれたのだから、仏の許へ行きぜひ供養して欲しいと述べたくだりの句で、それが歌題とされたのである。

なお、岩波文庫『法華經』には「一眼の龜」に注があり、

大海に一孔を有する一浮木の漂えるあり、海底に百年に一回浮上する一眼の盲龜あり、この盲龜が一浮木の孔に出逢うことは殆んど不可能と

云つてよい程困難であるが、愚痴の凡夫は五道に流転して人身を復することはそれよりも困難であるという(雑阿含經十五卷大正藏二卷一〇八頁下)。今は仏に値い難きことを譬えるなり。

(岩波文庫「法華經」、下巻)

とある。「大正新脩大藏經」(以下、適宜「大正藏」と略称)、および、「国訳一切經」の「雑阿含經」を閲すると、卷第十五の第四〇六話に、爾時世尊告諸比丘。譬如大地悉成大海。有一盲龜。壽無量劫。百年一出其頭。海中有浮木。止有一孔。漂流海浪。隨風東西。盲龜百年。一出其頭。當得遇此孔不。阿難白佛。不能世尊。所以者何。此盲龜。若至海東。浮木隨風。或至海西。南北四維圍遶亦爾。不必相得。佛告阿難。盲龜浮木。雖復差違。或復相得。愚癡凡夫。漂流五趣。暫復人身。甚難於彼。

爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく「譬へば大池悉く大海と成るに、一盲龜有り、壽無量劫にして、百年に一たび其の頭を出だすが如し。海中に浮木の止まれる有りて一孔有り、海浪に漂流して風に隨つて東西す。盲龜百年に一たび、其の頭を出だすに、當に此の孔に遇ふことを得べきや不」と。阿難、佛に白さく、「能はざるなり、世尊、所以は何ん、此の盲龜、若し海の東に至れば、浮木は風に隨ひて或は海の西に至らん。南北四維を圍遶するも亦た爾なればなり。必ず相得ざらん」と。佛、阿難に告げたまはく、「盲龜浮木は、復た差違すと雖も、或は復た相得ん。愚癡無聞の凡夫、五趣に漂流せば、暫く人身に復すること、甚だ彼よりも難し。

とあり、「一眼之龜」ではなく「盲龜」となっている。「盲龜」は盲目の龜という意であろう。「法華經」の一眼の龜は盲目ではなく、一つ眼の龜で、その眼は見えているということなのである。但し、龜の寿命が無量であるとか、百年に一度浮上するといったところなど、話の内容は「法華經」よりも詳しい。なお、「雑阿含經」によつて、龜が大海に漂流している様うかがい知れる。また、「雑阿含經」では人間として生まれることが難しいということの比喩として語られているのに対し、「法華經」では仏に値うことが難しいということの比喩として語られている。「法華經」の方が時代的に新しい成立であることも考えると、「法華經」が「雑阿含經」を受容し改変しているであろうことが推測できる。この句を含む題で詠まれたものに、選子内親王の、

妙莊嚴王品

又如一眼之龜、值浮木孔、而我等宿福深厚、生値仏法

ひとめにて頼みかけつる浮木には乗りはつるべき心地やはする(「発心和歌集」、五一)

がある。「ひとめ」はちよつと見る意の「一目」で、「一眼之龜」の「一眼」を掛けている。この歌は、前述した經文句の「一眼の龜が(大海に漂流する)浮き木の穴に出会う」ことの難しさを發展させ、浮き木に出会つて後にもその浮き木に乗りおおせる気持ちがない、きつと困難であるに違いないように詠んでいるものと解せられるが、石原清志氏は、

一眼の龜が大海に漂う浮木に遇うことは困難を極めることであり、大海の中を模索して漂う浮木を探り求め、それに乗り果つる心地がするで

あろうか、それは絶対に不可能のように思われることであろう。然し、このような困難を乗り越えて出家を遂げ、仏門に入られ、妙法「法華経」を受持し、読誦し、弘布せられた浄蔵浄眼の両菩薩の尊さよ、というのであろう。⁷⁾

と、言外の意まで汲み取った解釈をされている。◇我やこれ浮木にあへる亀ならん 私は、まあ、(大海に漂流する)浮き木に偶然にも出会った亀なのだろうか。「これ」は、「我」を再度述べるのに使った代名詞で、「我」を強調したものと考える。初句中の係助詞「や」と第三句末の助動詞「む」の連体形「む」(表記は「ん」とが呼応して、疑問の意を表す係り結びとなっている。自身を亀に見立てて詠まれた和歌に、「拾遺集」巻第二十、哀傷の、

女院御八講捧物に、金して亀の形を造りて、詠み侍りける 齋院(選子内親王)

業尽くす御手洗川の亀なれば法の浮木に逢はぬなりけり(一三三七)

が先行歌としてある。女院すなわち東三条院藤原詮子が行った法華八講の法会の供物に金細工の亀を贈り、自分は仏事を忌む神に仕える齋院の身であるので法華八講に参列できないと嘆いた歌である。釈教歌の分類でいえば法縁歌に属する和歌といえるが、内容に見合う「法華経」の经文句を考えれば、俊成当該歌と同じ「又如一眼之亀値浮木孔」が想定されていると考える。俊成は、「罪深い亀なので法の浮き木に会えない」と詠むこの歌を下地に、「法も知らない老亀であるが法の浮き木にあえたことよ」と詠んでみせたのである。◇劫はふれども」年齢は重ねたけれど。「劫」は仏教用語できわめて長い時間の単位として用いられるが、ここでは、「劫を経る」という慣用句として用いられて、「長い年月を経る」、あるいは、「年功を積む」意を表している(『広辞苑』第六版)。上句の「亀」の縁で「甲羅」の意の「甲」が「劫」に掛けられていよう。◇法は知らぬを 仏法は知らないのに。「法」は「法華経」、またその教え。似た表現に「法しらぬ」があり、同時代の西行の作、「法しらぬ人をぞ今日は愛しと見る三つの車に心かけねば」(『山家集』、八八〇番歌、歌題「譬喩品」)が見られる。

【評】 仏に出会うことは、一眼の亀が大海に漂流する浮き木に出会うほどの難事である上に、年齢は重ねたけれど仏法を何も知らない自分が、出会うこととなったのだなあと、その幸運をかみしめている歌。

経典では、仏に出会うことは、優曇波羅華が花開くように、また、一眼の亀が(大海に漂流する)浮き木の穴に出会うように難しいものなのに、浄蔵・浄眼の二王子は、前世の善行によつて、仏に出会うことができたということが中心に述べられている。俊成歌は、(前世の善行どころか)この現世で何もせずただ年齢を重ねてきただけの自身が、仏法に出会えたのだと詠んでいる。それは衆生を救おうとする仏法の偉大さを詠んでいることにもなるのであろう。

なお、俊成当該歌と同題で詠んでいる西行の、「聞書集」収載「法華経二十八品歌」の和歌、

厳王品

又如一眼之龟值浮木孔

同じくはうれしからまし天の河法をたづねし浮き木なりせば(二九)

は、武帝の命を受けて張騫が天の河の水源を尋ね牽牛・織女に会ったという中国の故事を取り込んだ作で、俊成歌とは趣を異にしている。

勸発品

即往兜率天上

430 遙かなるそのあか月を待たずとも空の景色はみつばかりり

【題意】「勸発品」の歌。そして、(弥勒菩薩の居る)兜率天上の世界に往生するであろうという趣意を詠んだ歌。

【歌意】遙かな先の、龍華三会の暁を待たなくても、「法華経」を受持し修行を続けてゆけば、命終の日に弥勒菩薩の居る兜率天上の世界に往生する、その暁に天上の様子はきつと見ることが出来るに違いない。

【語釈】◇勸発品 「勸発品」は、「普賢菩薩勸発品」を略したい方で、「法華経」の第二十八品。「法華経」全二十八品の最後の品になる。この品では、普賢菩薩が、東方世界から靈鷲山に現われ、釈尊に「法華経」説法を願うところから始まり、説法を聞いた後は、末世において「法華経」を受持する者がいれば六牙の白象に乗って出現して守護することを誓う。さらに、釈尊と普賢菩薩とが交互に、「法華経」受持者の功德の大きなことを述べ、この経を書写したものは帝釈天の浄土である刀利天に往生し、受持・読・誦・解義したものは弥勒菩薩の浄土である兜率天に往生するのであることが示されている。◇即往兜率天上 そして、弥勒菩薩の居る兜率天上に往生する。この句は、「普賢菩薩勸発品」では後半の長行部分に出てくる。その句を含む前後数句を引用すると、

若有人受持讀誦。解其義趣。是人命終。爲千佛授手。令不恐怖。不墮惡趣。即往兜率天上。彌勒菩薩所。彌勒菩薩。有三十二相。大菩薩衆。所共圍遶。有百千萬億。天女眷屬。而於中生。

若し人ありて、受持し讀誦し、その義趣を解らば、この人命終するとき、千仏は手を授けて、恐怖せず惡趣に墮ちざらしめたもうことを爲し、即ち兜率天上の弥勒菩薩の所に往き—弥勒菩薩は三十二相ありて大菩薩衆に共に圍遶せられ、百千万億の天女の眷屬あり—而ち中において生れん。

(岩波文庫「法華経」、下巻)

とある。「法華経」受持者の功德の大きさの証拠例の一つを示した句である。◇遙かなるそのあか月 遙かな先の、龍華三会の暁。「遙かなる」は、

ここでは時間的に遠く隔たっているさまを指す。「あか月」は、夜明けに近い時間帯で「暁」の表記の方がわかりやすいが、底本のままの表記とし「暁」の字には直さなかつた。「その」は代名詞であるが、なにを指しているのかはわかりづらい。仏教に関わって「遙かなるその暁」といえば、藤原家隆の、

暁の空にたなびく浮雲や遙かなる世の印なるらん(壬三集一、九八六、歌題「暁」)

にみられるような、「遙かなる世」の「暁」で、弥勒菩薩がこの地に下生して龍華樹の下で成道し衆生済度のために三度説法をするという「龍華三会」の「暁」が考えられる。◇空の景色は見つけかりけり(命終の日に弥勒菩薩の居る兜率天上の世界に往生する、その暁に)天上の様子はきつと見ることが出来るに違いない。「空の景色」は、空の様子。兜率天上世界の雰囲気を比喻したものと考える。前項で記述した経文句の中に「是人命終。……即往兜率天上。弥勒菩薩所。」の句があるので、「法華経」受持者が死を迎える日の、その暁の兜率天上の様子を指していると考えられる。⑩「見つけかりけり」の「つべかり」は、完了の助動詞「つ」の終止形に推量の助動詞「べし」の連用形「べかり」がついて強い推量を表したものの、「けり」は、過去の助動詞「けり」の終止形で詠嘆を表す。和歌大系「長秋詠藻」は、「見つ」を、「見つ」と「満つ」の懸詞」と注している。

【評】「法華経」を受持し修行を続けてゆけば、命終の日に弥勒菩薩の居る兜率天上の世界に往生するに違いないことを詠んで、「法華経」を受持し修行を続けてゆくことの大切さ、その功德の偉大さをたたえ、功德を受ける喜びを表明した歌。

【法華経】は、初期大乘仏教經典の中でも重要なものの一つであり、その教えの特色は、「宇宙の統一的真理(一乗妙法)」「久遠の人格的生命(久遠釈迦)」「現実の人間の活動(菩薩行道)」を説くところにあるという。⑪【法華経】二十八品の構成は、大きく迹門・本門に大別され、それぞれに序分・正宗分・流通分のまとまりがある。また二十八品全体を序分・正宗分・流通分の三区分で構成することもできるといえる。流通分とは、「法華経」受持者の人間的活動(菩薩行道)を説いたものと理解でき、この「普賢菩薩勸発品」は流通分の最後の品でもあり、「自行流通」を説くとされる。俊成当該歌は「法華経」受持者の流通行為の功德の一端としての兜率天上への往生とその喜びが詠まれていることに意味があるといえよう。

無量義経

船師大船師

431

とも綱は生死の岸に解き捨て、解脱の風に舟よそひせよ

【題意】「無量義経」の和歌。(諸々の菩薩は、例えば)船長であり大船長であるという趣意を詠んだ歌。

【歌意】 船頭がこちらの岸に繋いでいる船のちよい網を解いて、旅人の乗る船を向こう岸へ渡す順風を受けるために出船の準備をするように、諸菩薩は人生の船頭や大船頭であるので、生死流転のこの世界に執着する衆生の迷いを解き放ち、涅槃の境地に導く【法華經】という大いなる教えを説くために準備をして下さい。

【語釈】 ◇無量義經 「無量義經」は、法華三部經の一つに数えられ開經と称され、その經名は、「無量義經」の「説法品第二」中に、「性欲無量なるが故に説法無量なり、説法無量なるが故に義も亦無量なり。無量義とは、一法より生ず。其の一法とは即ち無相なり。」とあるのに基づくといふ。◇船師大船師 (諸々の菩薩は、例えば) 船長であり大船長である。この句は、「無量義經」の「徳行品第一」の中に見られる。この句を含む前後数句を引用すると、

處處爲衆生。作大良導師。大導師。能爲衆生盲。而作眼目。聾別聾者。作耳鼻舌。諸根毀缺。能令具足。顛狂荒亂。作大正念。船師。大船師。運載羣生。度生死河。置涅槃岸。

處處に衆生の爲に、大良導師・大導師と作る。能く衆生の盲ひたるが爲には而も眼目を作し、聾・別・聾の者には耳・鼻・舌を作し、諸根毀缺せるをば能く具足せしめ、顛狂荒亂なるには大正念を作さしむ。船師・大船師なり、羣生を運載し、生死の河を度して涅槃の岸に置く。

とある。諸々の菩薩が、ある時は大良導師や大導師となり、ある時は船師や大船師となつて、衆生を涅槃に向かわせるというのである。◇とも綱「とも」は「爐」で船尾。「とも綱」は、船尾の方から出して船を他の船や岸につなぎとめる綱のこと。船首の方から出してつなぎとめる「舳綱(へづな)」とともに「もやい綱」とも呼ばれる(小学館『日本国語大辞典』第二版)。当該歌よりやや後の作になるが、『法門百首』の「別」の歌に、

仁王經、長別三界苦輪海

厭ひこし憂き世の海に船出して今日とも綱を解く日なりけり(六〇)

十善菩薩大心をおこして、ながく三界の苦輪をわかるるといふ文なり、十善菩薩といふは十信のくらゐなり

という作がある。◇生死の岸 川のこちら側(此岸)とあちら側(彼岸)を相對峙させ、迷いの世界に輪廻する人間の境界を此岸、悟りの境地である涅槃の境地を彼岸という語で比喩するとき、「生死の岸」はこちら側の岸で、生死流転を繰り返す娑婆世界の比喩となる。掲出した經文句中の「度生死河」を取り込んだ表現。「生死の岸」という表現は、俊成歌以前には見出せなかつた。かなり後の作であるが、『建武三年住吉社法楽和歌』に収められた「秋夜於住吉社詠三首和歌」のうちの一首に、俊成歌と同題で詠まれた、

とも綱を生生死の岸に捨ててはて解脱のかけに渡る船かな(一一三、道戒、歌題「船師大船師無量義經」)

があつた。歌題も俊成歌と同じである。使用された語やその配置具合、歌柄など俊成歌の影響下に詠まれたものと考えられる。第四句の「解脱のかけに」が難解であるが、「解脱の風に」であるならさらに俊成歌に似てこよう。◇解脱の風に舟よそひせよ(船を向こう岸へ渡す順風を受ける

ために出船の準備をするように)、(衆生を)涅槃の境地に導く「法華経」という大いなる教えを説くために準備をして下さい。「解脱」は、「迷いの苦悩からぬけ出て、真の自由の境地に達すること」(小学館『日本国語大辞典』第二版)、また、「その、到達されるべき究極の境地。涅槃」(『広辞苑』第六版)という。「風」は自然現象としては、物を動かし運ぶ空気の流れで、船の帆に吹いて、船を此岸から彼岸へ追いやる風であろうが、ここでは、衆生を涅槃の境地に導くものの比喩としても使われている。比喩としての「風」は、当該歌が「法華経」の開経である「無量義経」の和歌であることを考え、「無量義経」の後に説かれる「法華経」を比喩しているものと解したい。「解脱の風」という成語は、日常世界では船を向こう岸へ渡す順風の比喩でもあり、精神世界では衆生を涅槃の境地に導く「法華経」の比喩ともなっている。如上のような二重構造で現代語訳して、はじめてこの歌が十全に理解できるのではなからうか。「舟よそひせよ」は、船頭に向かって「出船の準備をしなさい」という命令形の句であるが、仏教に関わっていえば、菩薩に向かって「衆生を涅槃の境地に導く『法華経』という大いなる教えを説くために準備をしなさい」という意となる。しかし、誰が菩薩に命令をするのか分かりづらく、ここでは衆生である我々が菩薩に依頼するという形に訳してみた。あるいは、作者俊成は、「釈尊がこれから『法華経』の説法をするので衆生がそれを受け入れられるように準備をしなさい」と言っていると考えて、命令形の表現としたのかも知れない。なお後考を期したい。

【評】 日常世界で船頭が船をこちらの岸から向こうの岸へ渡す様と、諸菩薩が船師・大船師として衆生を迷いの此岸から涅槃の境地すなわち彼岸に導く様を重ね合わせながら詠んで、「無量義経」の後に「法華経」がやがて説かれるであろうことを示唆した歌。

【無量義経】は、現代では印度撰述ではなく中国で撰述されたとする説もあるようであるが、古代においては「法華経」の開経であるとする意識は通念であろうから、「無量義経」和歌をその内容に沿って詠むことばかりでなく、「法華経」と関連づけて詠むことも多いと考える。俊成の時代にはそれは普通のことであつたらう。

なお、「解脱の風」は、「無量義経」の「徳行品第一」中に、

微滌先墮。以滝欲塵。開涅槃門。扇解脱風。除世熱惱。致法清涼。

微滌^{みた}先づ落ちて以て欲塵^{ひた}を滝し、涅槃の門を開き解脱の風を扇いで、世の熱惱を除き法の清涼を致す。¹⁶

とあるのによつていよう。俊成の和歌作りには、歌題句やその歌題句の前後の経文句だけではなく経典全体への目配りも怠らない配慮がされていることを知るのである。「解脱の風」という表現は、俊成歌以前には見出せなかったが、「無量義経」の経文句「解脱風」を歌題に含むものとして、

【法門百首】の「秋」中に、

開涅槃門扇解脱風

押し開く草の庵の竹の戸に袂涼しき秋の初風(二一)

これもおなじところの文なり、二乗をば止宿草庵とて、草のいほりにたとへたり
 という作があつた。また、「明恵上人集」に、

禪堂へゆくとき曇りたる月、出観ののち雲間より出でて、松風にたぐひてわりなきに
 心月のすむに無明の雲はれて解脱の門に松風ぞふく（八八）

という作があり、「解脱」と「風」の取り合わせに見るべきものがある。

普賢経

衆罪如霜露 惠日能消除

432 露霜と結べる罪の悔しさを思ひ解くこそ朝日なりけれ

【題意】「普賢経」の和歌。諸々の罪というものは、霜や露のようなものである。日の光が霜や露を解かすように、優れた智慧はそれらの罪をよく消し去るのであるという趣意を詠んだ歌。

【歌意】露や霜が結ぶように、六根が積み重ねてきた多くの罪を後悔してきたが、よくよく考えると、霜露を解かすのが朝日であるのと同じように、罪を消し去るものこそ優れた智慧だったのだなあ。

【語釈】◇普賢経 「普賢経」は「仏説観普賢菩薩行法経」を略したいいい方で、略称としては「観普賢経」、「普賢観経」などともいい、法華三部経の結経とされる。「法華経」の「普賢菩薩勸発品」を承けていて、普賢菩薩を観する法と六根の罪を懺悔する法、およびその功德が中心に説かれているという（小学館『日本国語大辞典』第二版）。本稿では以下、「観普賢経」と略称する。◇衆罪如霜露 惠日能消除 諸々の罪というものは、霜や露のようなものである。日の光が霜や露を解かすように、優れた智慧はそれらの罪をよく消し去るのであるという意。この句は、眼耳鼻舌身の六根をそれぞれ取り上げ、それら六根が積み重ねてきた多くの罪のすべてを告白し、大乘経を誦して心から懺悔することで、罪によって起る報いを取り除かれるようにしなさいという、いわゆる六根の罪を懺悔する法が説かれた後のまとめに相当する偈頌の中に出てくる。この句を含む前後数句を引用すると、

一切業障海 皆從妄想生 一切の業障海は 皆妄想より生ず

若欲懺悔者 端坐思實相 若し懺悔せんと欲せば 端坐して實相を思へ

衆罪如霜露 慧日能消除 衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す
 是故應至心 懺悔六情根 是の故に 至心に 六情根を懺悔すべし¹⁸⁾

とある。結局、全ての罪は人間の妄想から生まれてくるのだから、その罪を懺悔しようと思えば、端坐して諸法の実相を思念し見抜くことが大事であるし、諸法の実相を見る優れた智慧はそれらの罪をよく消し去るのであるというのである。当該歌では「慧日」を「朝日」に置き換え自然描写風の和歌表現となっているが、仏教的には諸法の実相を見る優れた智慧にはかならないのである。この句を歌題にした先行歌に、

普賢經 衆罪如霜露、慧日能消除、是故應至心、懺悔六情根

作りおける罪をばいかで露霜の朝日にあたるごとく消してん(『発心和歌集』、五三)

衆罪如霜露といへる文を詠める 覚誓法師

罪はしも露も残らず消えぬらん長き夜すがらくゆる思ひに(『金葉集』「異本歌」、七〇八)

の二首があつた。後者の七〇八番歌は、左注に「同巻第十、六三三の次」とある。『金葉集』巻第十は、六二六番歌から六四七番歌までが釈教歌群である。両首とも、掲出した経文句中の「霜」「露」「消除」を核として使用し、『発心和歌集』歌は、「慧日」を「朝日」と表現し、『金葉集』歌は、「端坐思實相」を「くゆる思ひ」と表現した歌作りとなっている。なお、『法門百首』と『宝物集』にも同時代の作が収載されているなど、同題で詠まれた和歌は相当数あつたものと思われる。◇露霜と結べる罪の悔しさを 露や霜が結ぶように、六根が積み重ねてきた多くの罪を後悔してきたが、自然現象を表す語と精神作用を比喻する語とがない交ぜに用いられていて、現代語訳しづらい表現である。露や霜が草葉や地面に置くことを「結ぶ」と比喩的に表現し、さらに、「結べる罪」と「結ぶ」の語が下にもかかつてゆく用い方をしている。◇思ひ解くこそ朝日なりけれよくよく考えると、霜露を解かすのが朝日であるのと同じように、罪を消し去るものこそ優れた智慧だつたのだなあ。「思ひ解く」は経文句「端坐思實相」を、「朝日」は経文句「慧日」を和歌的に表現したものと考ええる。よくよく考えてみるとそうだつたのだなあという感動が込められている。「思ひ解く」には、「日」が(霜露を)「解く」という如く、掛詞も用いられている。係助詞「こそ」と過去の助動詞「けり」の已然形「けれ」どが呼応して、強意を表す係り結びとなっている。

【評】眼耳鼻舌身意の六根が積み重ねてきた多くの罪を、消し去るものこそ優れた智慧なのだという教えを、夜のうちに結んだ霜露を朝日が解かすという自然現象と重ね合わせて詠み、『観普賢經』が説く諸法の実相を見る優れた智慧の力を讃嘆した歌。

和歌大系『長秋詠藻』は、「同題の類似の一首」として、『教長集』の、

処処仏名(六一九歌題)

日の光照らせば消ゆる露霜は仏の御名にあへる罪かも(六一二)

をあげている。俊成は後年、『六百番歌合』の冬歌「仏名」題の三十番において、

三十番 左持 女房

一年の儂き夢は醒めぬらん三世の仏の鐘の響きに(五九九)

右 信定

唱へつる仏の御名は朝日にてやがて消えゆく一年の露(六〇〇)

左右共無難之由申す

判云、左歌、儂き夢は醒めぬらんといひ、三世の仏の鐘の響きにといへる、姿心ことによるしくこそ見え侍れ、右歌、又仏の御名は朝日にてと置きて、やがて消えゆく一年の露といへる、かの観普賢経の衆罪如霜露、恵日能消除といへる文叶之、方方心うつりて勝負已難分、持と申すべし

と、【観普賢経】から俊成当該歌題と同じ偈誦を取り上げて判を記している。歌題が違っても霜露を朝日が照らし消すといった詠み方をする和歌をみれば、【観普賢経】の偈誦を想起するというのが当時の常識であつたかのようにみえる。【観普賢経】の「衆罪如霜露、恵日能消除」という表現自体が、自然現象を取り込んだ比喻表現なのだということの証左でもあろう。

433 春の花秋の紅葉の散るも見よ色はむなしきものにぞありける
心経

【題意】「心経」の趣意を詠んだ歌。

【歌意】春の美しい花も、秋の美しい紅葉も、必ず散つてゆく。その散るという現象を正しく見なさい。まことに、【般若心経】の教えの通り物質的現象というものは儂く実体がないのであるよ。

【語釈】◇心経 「心経」は、【般若波羅蜜多心経】の略称。また、【般若心経】とも称される。鳩摩羅什や玄奘の訳など七本が現存するという。字数三百字足らずの中に、般若經典群に説かれる内容を、たとえば「色即是空」「空即是色即」といった句に示される「空」の一字に凝縮し、また末尾に真言を添えて「悟り」つまり「彼岸」への到達をたたえた經典であるという(岩波仏教辞典)。本稿では以下、【般若心経】と略称する。

なお、【法華経】とその開結二経【無量義経】【観普賢経】をあわせた法華三部経に、この【般若心経】と次の【阿弥陀経】を加えた五経を一括

して法華具經という。⁽²⁰⁾ ◇春の花秋の紅葉の散るも見よ 春の美しい花も、秋の美しい紅葉も、必ず散ってゆく。その散るという現象を正しく見なさい。「春の花」は古典にあつては桜と解されるのが普通であるが、ここでは春に咲く美しい花すべてと考えていい。「秋の紅葉」も美しく色彩を変化させる草木すべてと考えていい。春秋の美しさを一対として取り立てることは、『常陸国風土記』に見られる歌垣が行われる春秋の描写や、『万葉集』に見られる春秋争いの歌以来行われていることで、韻文散文問わず見ることが出来る。物語では、『宇津保物語』の「国譲・上」の、

かくて、藤壺のおはする町はいと面白し。(中略) すべて春の花、秋の紅葉面白く、時々の前栽草木もいとをかし。(古典大系本)

や、『栄花物語』巻第一の「月の宴」の、

かく帝の御心のめでたければ、吹く風も枝を鳴らさずなどあればにや、春の花も句のどけく、秋の紅葉も枝にとまり、いと心のどかなる御有様なり。(古典大系本)

などがあり、和歌では、

同じ頃、男、春日へ行きたる人に

春の花秋の紅葉も忘れぬ唐撫子のはふ盛りは(『定頼集』〈新編大観、第七卷所収本〉、一四八)

山家より京なる人の許へ

春の花秋の紅葉の折ごとに都の人の心をぞ見る(『治承三十六人歌合』、一一三、寂超為経)

などがそのよい例であろう。なお、俊成には、後年の「右大臣家百首」中に、

春は花秋は紅葉となぞやこの四方の山辺よ人さそふらん(古典大系『長秋詠藻』、五五四、歌題「紅葉」)

と詠んだ歌もある。

俊成当該歌の上三句は、「春の花」「秋の紅葉」を散るといふ発想においてとらえることで、下二句に示される『般若心経』の空の思想の表明につながるよう句作りがされている点で他とは異なる。式子内親王の歌の、秋の紅葉は詠み込まれていないが、

百首歌中に 式子内親王

花は散りその色となく眺むればむなしき空に春雨ぞ降る(『新古今集』巻第二、春歌下、一四九)

という作や、和歌大系『長秋詠藻』に指摘のある、

春は花秋は紅葉と散りはてて立ち隠るべき木の下もなし(『拾遺集』巻第二十、哀傷、一三二一、よみ人知らず、詞書省略)

などが、似た発想で詠まれているものと考ええる。◇色はむなしきものにぞありける(『般若心経』の教えの通り)物質的現象というものは儂く実体がないのであるよ。「色」は、色彩に関しては服装の色合いなどを表し、色彩を離れては人間の美しい容姿や顔色、また、はなやかな風情、面白

い趣、情愛、気配、様子など、多種多様に用いられる語であるが、仏教ではこれを「色」といい、物質的現象の総称として用いるとされる（小学館『日本国語大辞典』第二版）。ここでは春の花や秋の紅葉が散つてゆくという現象を根拠にして詠まれているので、目に見えている物質的現象というものは儂く実体がないのだという【般若心経】の教えを表す仏教語として用いられていると考える。「むなし」は、「空」「虚」の字をあて、空虚なとか（仮初めで）儂いといった意の形容詞であるが、ここでも仏教用語としての「空」で、実体がないものという意味で用いられていると考へる。和歌大系【長秋詠藻】は、参考歌として【金葉集】巻第十、雑部下の、

心経供養してその心を人人に詠ませ侍りけるに 撰政左大臣（藤原忠通）

色も香もむなしと説ける法なれど祈るしはありとこそ聞け（六二六）

をあげている。この上二句を参考にして、俊成が自歌の下二句の句運びを工夫したということなのであろう。

【評】自然現象としての花や紅葉の散る様を見てみれば、【般若心経】の「色即是空」の教えそのままに、物質的現象というものは儂く実体がないのだということがわかると詠んで、【般若心経】の教えを讃嘆した歌。

俊成は、およそ七年後に「久安百首」を詠むが、その中の釈教歌の一首に、

雲も皆むなしと説くに空晴れて月ばかりこそ澄み増さりけれ（古典大系【長秋詠藻】、八五、歌題「般若」）

と詠んでいる。「色即是空」の和歌的表現から、「空即是色」をも視野に入れた和歌表現へと発展した歌となっていると理解できる。同じ「久安百首」で、崇徳院も釈教歌に、

心経、色即是空空即是色

押し並べてむなしと説ける法なくは色に心や染みはてなまし（新編大観【久安百首】、八九）

と詠んでいる。

【新撰六帖題和歌】、第五帖の、藤原知家の歌、

春といひ秋と梢の変はるにも色はむなしきものどこそ見れ（一八六八、歌題「色」）

は、俊成当該歌の影響になったものといえる。

注

(1) 【真訓両読妙法蓮華経並開結】（法華経普及会、平楽寺書店、大正二三・九）、庭野日敬氏【新釈法華三部経】9（佼成出版社、昭和四三・

四) など。

(2) 石原清志氏「釈教歌の研究―八代集を中心として―」(同朋舎出版、昭和五五・八)。「㊟の歌」は、当該後成歌を指す。「この末尾の部分」とは、引用文の前に記述されている、十羅刹女の誓いの内容を概説した部分で、石原氏が当該歌の歌題を現代語訳した、「時には夢の中まで現われて、『法華経』受持者を悩ませようとしても、この呪をとこなえて、その害からのがれさせるようにしたい」の部分²⁰を指す。

(3) 山田昭全氏「西行法華経二十八品歌評釈」(大正大学研究紀要、第七〇輯、昭和六〇・二二)、後、「西行の和歌と仏教」(明治書院、昭和六一・五)に所収。引用は単行本による。引用文中の傍線も山田氏。石田氏への批判は、注(24)において補足的に述べられている。

(4) 求那跋陀羅訳「雑阿含経」(大正蔵、Vol.02、No.0099)。引用は、「大正新脩大蔵経」第二卷〈阿含部、二二〉(大正蔵刊行会、昭和四四・九〔再刊〕)所収の本文による。この話は、曇無讖訳「大般涅槃経」(大正蔵、Vol.12、No.0374)卷第二十三、竺曇無蘭訳「仏説泥梨经」(大正蔵、Vol.01、No.0086)などにもある。

(5) 「新訂雑阿含経」。引用は、「国訳一切経」印度撰述部〈阿含部、二二〉(椎尾辨匠氏訳、大東出版社、平成四・三〔改訂七刷〕)所収の本文による。

(6) 日蓮の「松野殿後家尼御前御返事」(「日蓮大聖人御書全集〔拡大版〕」下〔堀日亨氏編、創価学会、昭和六二・一〕所収)に、一眼の亀の腹が鉄が焼けるように熱く、大海に浮かぶ赤梅檀という聖木の穴に腹を入れて冷やすという話がある事や、「類題法文和歌集注解」の俊成当該歌他四首の解説(「類題法文和歌集注解」第二卷〔塚田晃信氏編、古典文庫、昭和六一・二二〕)中に、顔ではなく腹に一眼のある亀が大海の浮木に遇うという話がある事なども知ることが出来たが、それらの典拠については未調査で後考を期したい。

(7) 石原清志氏「発心和歌集の研究」(和泉書院、昭和五八・三)

(8) 選子内親王の歌の亀が「法華経」の「一眼之亀」であるのか、「雑阿含経」・「大般涅槃経」などの「盲亀」であるのかは、必ずしも明確ではないが、法華八講のための供物の亀を捧げたことが前提になっていることを思えば、「一眼之亀」と理解してよいであろう。なお、同歌は、「玄女集」に初句を「罪深き」と違えて入集しているが、そこでの詞書が、「前の一宮より、亀の形を造りて、一眼のなどありて奉り給へりければ」とあるのも参考になる。

(9) 竺法護訳「佛説彌勒下生經」(大正蔵、Vol.14、No.0453)参照。ただし、三度の説法は描かれているが「暁」の文字はない。「龍華三会之暁」という成語は、東京大学の「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」を検索しても、吉蔵撰の「法華義疏」(大正蔵、Vol.34、No.1721)と、親鸞撰の「顯淨土眞實教行證文類」(大正蔵、Vol.83、No.2846)に出てくるだけである。俊成当該歌における「その暁」を「龍華三会之暁」と解しているものに、「法華受持の人は弥勒仏のおはします兜率天上にむかへらる、ことをよめり。元来此弥勒仏は竜花三会之暁にいてお

はせと、その折をまつに至らず。唯今にして其内院のけしきはみるへしとの心なり」と述べている【類題法文和歌集注解】(「類題法文和歌集注解」第二卷)がある。

(10) 和歌大系「長秋詠藻」は、「空の気色」の表記になっていて、「往生士の雰囲気」と注しているだけで、その空の気色をいつ見るのかは示していない。初二句の「はるかなるその暁」を、「歌題の前文に『是人命終』とあり、それからすれば命を終える時の意。」と注しているので、現代語訳は記されていないが、「命を終える時の暁を待たなくても、今このときに空の気色は見る…」あるいは「修行者ならば」 いつでも空の気色は見る…といった現代語訳が導き出せるかと解される。本稿では、「法華経」受持者が見る空の景色は「命終の日の暁の兜率天上の様子」と解するが、注(9)にあげた【類題法文和歌集注解】第二巻では、「唯今にして其内院のけしきはみるへし」とも述べている。【法華経】受持者が見る「はるかなるその暁」はいつの暁で、「空の景色」はどのような景色なのか、さらに考察が必要であろうと考える。後考を期したい。

(11) 【岩波仏教辞典】参照。拙稿「長秋詠藻」評釈(6)でも記述している。

(12) 岩波文庫【法華経】下巻、解説「三、法華経総科」参照。

(13) 水野弘元氏他編【仏典解題事典】(春秋社、昭和五二・九(第二版第一刷))、「無量義経」の項参照。

(14) 注(1)の【真訓両読妙法蓮華経並開結】による。

(15) 注(13)【仏典解題事典】、および、注(11)【岩波 仏教辞典】の各「無量義経」の項参照。

(16) 注(1)【真訓両読妙法蓮華経並開結】による。

(17) 前歌二〇番と同様【無量義経】中の経文句であることをいう。二〇番歌では、経文句「除世熱惱致法清涼」が歌題となっている。

(18) 注(1)の【真訓両読妙法蓮華経並開結】による。

(19) 【法門百首】では、「衆罪如霜露」の歌題で、

春きなば心のどけく照す日にかなる霜か露も残らん(冬、四〇)

これもおなじ所の文なり、我が心むなしとて隠せば、罪障ぬしなし、妄想の暗はれて恵日のどかに照すべき時を、春きなばと云ふにやという作を見ることが出来る。左注の「これもおなじ所の文なり」というのは、前歌三九番と同様【観普賢経】の偈誦であることをいう。三九番歌では、経文句「如空中風無依止処」が歌題となっている。また、【宝物集】第七冊では、【観普賢経】の偈誦、「一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐思質相 衆罪如霜露 恵日能消除 是故応至心 懺悔六根情」(四四五)を収載した後の、

命をも罪をも露に譬へけり消えば共にや消えんとすらん(四四六、覺樹法師)

露結ぶ霜に譬ふる罪なれば朝日まつまの歎きなりけり(四四七、登蓮法師)
 思ひとく法の光し照さずは身におく霜を誰はらはまし(四四八、賀茂重保)

心より結びおきける霜なれば思ひとく日は残らざりけり(四四九、前斎宮大輔)
 露霜に変はらぬ罪と消えつれど朝日の山の光をぞ待つ(四五〇、藤原盛方朝臣)

という五首を見ることが出来る。新編国歌大観本は韻文のみを収載しているので『宝物集』の意図がわかりにくいだが、例えば、新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』(小泉弘氏他校注、岩波書店、平成五・一一) 収載の『宝物集』によれば、この五首は、先に掲出した偈誦、「一切業障海……懺悔六根情」を示した後に、「この心を歌にもよみて待るめり。」と説明して引用されていることが知れるのである。

(20) 古典大系「長秋詠藻」の四三四番歌の補注「阿弥陀経」の項の「法華具経」の説明参照。なお、間中富士子氏「国文学に撰取された仏教」(文一出版、昭和四七・一一) 参照。

(21) 『常陸国風土記』の筑波郡の条に、

坂より東の諸國の男女、春の花の開くる時、秋の葉の黄づる節、相携ひ駢闐り、飲食を齋齎て、騎にも歩にも登臨り、遊樂しみ栖遅ぶ。

(古典大系本)

とある。

(22) 『万葉集』巻第一、雑歌、一六番歌(古典大系本) 参照。

(23) 『般若心経』の「色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。」の経文句に対応するサンスクリット原典からの邦訳、「この世においては、物質的現象には実体がないのであり、実体がないからこそ、物質的現象で(あり得るので)ある。実体がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。(このようにして、)およそ物質的現象というものは、すべて、実体がないことである。およそ実体がないということは、物質的現象なのである。」(中村元氏他訳注『般若心経 金剛般若経』(岩波書店、昭和四五・七)を参照して、現代語訳を付した。